

旅の一日

和田奈良子

チェコの首都プラハに着いたとき、私は宿便で悩んでいた。日本を発って九日目、もうどうにもならない状態に置かれて、体全体が重荷になっていた。

その日は中世の田舎町に、バスで観光に行く予定になっていたが、途中なにかあったときを考え、私は中止した。

一行の中に医師がいて、朝食後、これを飲みなさいと薬をもらった。一行の発った後、ホテルに頼んでもらったタクシーで、私は街に出かけた。自分のペースで、無理のないままな一日を過ごしてみようと思ったからだ。

ホテルを出て十分も走らないうちに、急に催してきた。あわてて会話集をひろげ、知っている限りの言葉を並べた。車は石畳の上を、バウンドをつけながら走っていき、やがて一つの建物の前に横付けされた。

急いで中に飛び込んだものの、暗くて、目の慣れるのさえもどかさなかった。

演台の向こうの警備の人が、笑顔で何かを喋った。分からない。分かる筈がない。ここはチェコなのだ。しばらく、体をよじったりしてみたが、もう立ってられない状態になった。そのときだ。動物的感觉が働き、一段下ったフロアにトイレがあるのを見付けた。

間一髪で間に合った。なにものにも替えがたい嬉しさだった。しばらく、じっと目を瞑った。気付くと、かなり広いトイレだ。床は大理石だろうか。便座も大きく、座り心地もよい。相当な年代物だが、水洗トイレである。いったい、いつの頃からあったものだろうかと思っただ。

落ち着くと、運転手のことが気になりだした。出てみると、先ほどの演台のところ立っていた。入口の右手のホールを指さしており、誘われるままについていった。

そこは小さな画廊だったが、ただ窓に飾ってあるのではなく、少々手の込んだ飾り窓として作られ、絵が嵌め込まれている。絵は見るときの気分にもよるが、パリの印象派の絵とは趣の全く違った重厚さを感じた。

外に出てみると、大勢の人が建物を見上げている。

やっと気が付いた。このゴシック風の建物は、旧市庁舎なのだ。今見上げる時計は、十五世紀の天文時計だという。時間が来ると、窓から人形が姿を現わす。

その昔、カトリックの議員ら七人を、窓から投げ出し虐殺した。これが、フス戦争に火をつける舞台となったところだったのだ。

では、あのトイレは、さぞかし名のある貴族たちも使ったことがあったのではないだろうか。

五百年の月日が、急に身近に感じられた。

(了)